

全日本学生ヨット個人選手権大会における戦術研究 Tactical research of 470 and snipe on intercollege2010

1K09B051 加藤 文弥
主査 太田章 先生 副査 深見英一郎 先生

【目的】

私は高校生の時にヨット部に入部し、そこで始めてセーリング競技を始めた。高校生の時にはインターハイで3位に入賞し、大学に進学してもヨット部に所属して活動を続けた。自己の競技力を上げ、全日本インカレで2回の団体優勝、2回の個人準優勝、部活動を引退後は、違うセーリングの環境に身を置き、アジアの学生チャンピオンにまで登り詰めた。自己の今まで培ってきた競技経験を下に、セーリング競技を各マークの回航順位をもとにセーリング競技の特性を分析し、今後の自己の競技やレース戦略の考え方の1つとして提案としたいと考え、回航順位をもとに競技分析をした。

【方法】

2010年度に福岡県小戸ヨットハーバーで行われた全日本学生ヨット個人選手権大会の大会運営委員会が記入した、470級とスナイプ級の各マークの回航順位表をもとに、各レグ（マークとマークの間）間の順位変動値とM1（第一回航マーク）とフィニッシュ順位の相関性を求める。また両クラスともに各レース毎にグループ分けを行い（上位10艇、中位15艇、下位18～21艇）、それぞれのグループの順位変動の傾向と、グループ毎の1Mとフィニッシュ順位との相関性も求める。また各クラス最終成績TOP5の選手の順位変動の仕方を算出し、順位が良い理由を順位変動から各レグの特性や船の性質を加味しながら考察していく。各クラス、各レグ毎の順位変動のポイントや理由を自己の競技経験から理由を考察する。

【結果】

470級では、全体では1Mと2Mの間で1番順位変動が起きている回数が多かったが、1番順位変動が起きていたのは3M～4Mへ向かうレグで2.7艇だった。双方の数値に差異はそれほどなかった。その反面、4M～フィニッシュへ向かうレグは1番順位変動が少なく平均で1.3艇だった。グループ分けをしての比較では上位グループが1番順位変動が少なくレグ毎で約1艇だった。中位と下位グループの順位変動についての差はさほど見られなかった。TOP5の選手たちのマークごとの順位変動はごく僅かでほとんど順位変動がみられなかった。

スナイプ級では470級と違い全体の順位変動では、

1M～2Mのレグでは大きな順に変動は見られなかったが、3M～4Mのレグでは大きくみられた。1M回航順位とフィニッシュマーク回航順位との相関性は470級との違いは見られなかった。グループ分けでの順位変動は、470級と同じく、上位集団の順位変動は僅かであった。しかし、中位と下位グループの順位変動の差があり、下位グループの方が順位変動が起きていた。また、順位変動の値も470級より大きく出ている。TOP5のグループについては、僅かではあるが各レグ毎で順位を上げている事が分かった。1Mとフィニッシュ順位の関係では、470級よりも順位を大きく上げているレースが見られた。

【考察】

両クラスともにグループ毎で分けてみると、上位グループの順位変動が少なかったが、それは1Mで前に出ることで後続の混戦に巻き込まれる事がなく走りやすいためである。中位以下になれば常に艇団として周りに船がたくさんいるため風も悪く、抵抗となる波も船の引き波で発生するため上位グループに追いつくことが難しくなる。良い順位を取るためには1Mをより良い順位で回航する必要があり、そのためには、上手くスタートを決めてフレッシュな風を受けながら走ること、1Mに向かうコースプランをスタート前に立て、強い風や良い風を受けて走るテクニックを身につけることが必要である。

各レグ間の順位変動の総和と1Mとフィニッシュ順位の相関性是一緒ではない。各レグ毎に順位を上げようとするよりは、スタートと風上に向かうレグの戦術や戦略をしっかりと実行することができれば、順位を上げることができる。両クラスともに、1Mを上位で回航すれば大きな順位変動することなく、上位でフィニッシュできる可能性が高く、3M～4Mの風上に向かうレグでも順位変動が大きいので風上に向かって走らせることの重要性がわかる。470級に関しては、1M～2Mでの順位変動のポイントとなっているので、1M回航後のスピンホイスト（スピンネーカーをいちはやくはらませる）をし、フレッシュな風を受けられるポイントをキープして走れるにしておくことも重要である。学生の練習では時間は限られているので、風上に向かうレグとスタートを重点的に練習することで良い成績につながっていく。